

百花道遥 倦鳥主宰講評

ピアノ売って居間吹き抜ける夕立風

智 昭

秀逸ですね。芭蕉翁の「不易流行」のお手本のように模範的な作品となった。まず第一に「夕立」の本意をよく踏まえております。天の底が抜けたかと思うばかりの豪快な白雨。降り止んだあとの涼風。天地万物生色を取り戻すのであるが、それがなんとピアノを処分したあとの居間を吹き抜ける。「ピアノ売ってちょうだい」とテレビのコマーシャル。今年は、このように絵に描いたような夕立が幾度かあった。

老街の隅で鳩売る日の盛り

雅 子

本句もまた季語「日盛」の本意に忠実である点が第一の長所である。夏の日中、もつとも暑い盛りの正午ごろから三時ごろまでの実景。

第二点目は、わが国固有の天候が、きわめて自然に海外で生かされていることである。第三点目は、当該国の生活の息吹が、固有の食材である「鳩」に象徴されて活写されていること。これらの諸点から秀逸の海外詠となった。「隅」の措辞がまた佳い。

座布団を三枚重ね昼寝かな

西 風

夏場は疲れが激しく、夜、眠りづらいので昼寝が体力の回復に役立つと、この風習はシエスタあたりと関係あるのだろうか。改めて床の用意も必要としないのであるが、そのため「昼寝覚」が名状し難しい気分になる。が掲句、若干の異変が感じられないこともない。唐突に座布団を重ねてひっくり返った経緯が匂うのである。「何かあったのか？」重ねての「て」は不要である。

成田まで友を送りて桐の花

慶 子

「逢う人はすべて一期一会と思い、心を込めた別れをしておきたい」とはどなたの言葉であったか。芭蕉の「おくのほそ道」の旅は元禄のころの旅とはいえ、その心構えは現代も不可欠。

高速鉄道三十六分で到着が可能となった平成の世、別れはわかれであろう。折から空港ターミナルの桐の花が盛り。甘い香りが心に残る「見送り」である。

(六月句会の「特選」一句、講評から漏れてしまいました。お詫びいたします。)
③

花桐や息災告ぐる母の文

マ サ

空港にも咲いていた桐の花。よく見ると初夏、紫の大型の唇形の花を円錐状につける。見た目には清楚で芳しい。思えば母の好む花である。

手紙が長いのか短いのかは全く不明である。が、「息災」なる一言が今日の花を一段と美しく見せてくれ、安堵感の感謝の気持を増幅してくれたことである。

雨宿り買ふとするなら葛桜

和代

「それはまだわたしが神様を信じなかった頃 九月のとある木曜日に雨が降りまして こんな日に素敵なかが現れないかと 思ったところへあなたが雨やどり・・・」(さだまさし) 仕方なく借りた和菓子舗の軒先。ふと覗くとあるある、白玉、葛餅、葛切、ゼリーなどなど。「買ふとするなら」が女性らしく楽しい。

早苗もつ手甲脚絆神の女

清龍

神事であろう。とすれば妙齢の女性が早乙女に扮しているの図が想像される。緋のモンペに白の手甲、脛あて、紅の襷そして真新しい手ぬぐいの姉さん被り。早苗の緑に添える白、赤、そして紺色の対比がなんとも清々しい。もうひとつ挙げるとすれば、空の青であろうか。

尋ね来し仏の道や夏木立

信貴

夏に枝を延ばした木が、はえ重なっている村や森のことである。先づ頼む椎の木もあり夏木立 芭蕉 のように夏木立は旅人のしばしの憩の場でもあった。今、信貴氏が尋ねているのは、在野の信仰でも実際の仏道修行どころでもよろしい。さわやかな夏木立を見上げての大自然への同化である。

つかみ取りシャシャと骨切る豆絞り

豊嗣

先ず省略の妙に気づかされるのである。直接挙げられてはいないが「鱧」である。

白身の高級魚で、味は淡白、関西では引く手あまたで賞味され、生き鱧も魚屋で売られる。身と皮の間に小骨が多く、掲句のようにシャシャと骨を絶つ。

豆絞りの板前さんを借りて店内のすべてを象徴的にスケッチした。

夏祭りサンバのリズムで西瓜割り

冬草

ブラジルはサンバの舞踏曲。危うくステップをふみそうになるが、西瓜割りは直進。

頭頭夏のオルセーモネかすか

河童

それでも本家のオルセーに行くよりゆっくり鑑賞できたという話もありました。

紫陽花の顔からから見てとる見栄っ張り

靖

人相ならぬ「花相」というものがあるのか。「これは見栄つ張りの紫陽花だ？」

加茂川のせせらぎの音魚素麺

弓人

加茂川の床で涼を取っておられるか？魚素麺もさることながらせせらぎが涼味。

髭をそる鏡にもあり梅雨の寒

しろう

梅雨寒は鏡の中にもあったという発見。水洩や鼻の先だけ暮れのこる 龍之介

火の玉に乗りて旅終えりんご食む

晶子

全く長期間宇宙の「火の玉」で暮し、地球へ戻ってゆうゆうと林檎を齧る凄い奴。

帰る来た燕の世話や新聞紙

藤則

去年の巣に戻る燕は約五割だという。それがめでたくもどって来たがお土産で？

叔父作る虎魚（オコゼ）料理の懐かしき

慶子

「カオアラワズ」とオコゼのことを呼ぶ地方があるとか。味は一級である。

天の川宇宙旅行も夢でなく

満紀子

火星まで飛んで行く時代である。天の川なんてはるか手前なのだ。

芝刈り機蚯蚓伸び出てうるさそう

善啓

蚯蚓が、芝刈り機を動かせばうるさがっているだろうと、やさしい 善啓氏。

見てみたや蛍袋の灯の光

黄雀

田舎の子は捉えた蛍を蛍袋の花に入れて持ち帰るといふ。それが見たい黄雀氏。

鳥兜の森（サングラス）講評

満紀子 選・評

皆さんから寄せられた兼題句の中の表現を借りると、私たちの年代になると「必需品」になるサングラス、これをつけると「何か冒険できそうな」気分になったり、「やや吾ならぬ吾」になったり「青綵」を隠すこともできます。でも「男の器量を色分ける」という油断ならぬ面もありそうです。暑い夏、少し息抜きしようと思ったら兼題に「さざえさん」まで飛び出して、魅力的ないい句が顔を揃え、その中からたった三句しか選べないのは私にとってまさに難行苦行でした。最後には独断と偏見と「遊びどころ」で蛮勇をふるって選ばせていただきました。

あの時の「マッカーサー」とサングラス

信貴

同じ世代に属する同窓生だからこそ、私たちの記憶に刻まれた共通のイメージが、この句を読むと鮮やかによみがえって来る。同時に、終戦から現在に至るまでの時間の流れや歴史の重みも感じられる。私たちの世代にとってはいろんなことを考えさせられる印象深い句である。

裸婦の画の前を動かぬサングラス

西風

サングラスをかけると、仮面をつけたようで大胆になれるのか、名画の前に佇ん

で、じつと動かず芸術鑑賞している威厳ある紳士の姿を想像すると、どういふわけか思わず笑つてしまう。もつと近くで見たいと次に待っている人もいるのに・・・。それにしても濃いサングラスだと、せつかくの名画の色調が変わつて見えてしまわないのかな？ちよつと心配。

古希の背やサングラス着けすこし伸び

善 啓

サングラスには人を若返らせる不思議な力があるのかもしれない。この句には、ユーモアのセンスだけでなく、私たちの年頃につきものの「負けちゃおれないぞ」という気概とそれにちよつぴり哀感が漂うところも味わい深い。

(後記)

リニユール二号目をお届けいたします。「鳥兜」も順調な生育ぶりで嬉しいですね。 倦鳥